

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 29 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520335

研究課題名(和文) 十八世紀ヨーロッパの描く異邦人像 ドイツとイギリスの通俗劇を中心にして

研究課題名(英文) Images of Foreigners in 18th Century German and British Popular Dramas

研究代表者

佐藤 研一 (Sato, Kenichi)

東北大学・国際文化研究科・教授

研究者番号：80170744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：十八世紀ヨーロッパ、とくにドイツの通俗劇が、非ヨーロッパの異邦人像をいかに描くのか、イギリス劇との相互影響も視野に入れながら考察を加えた。当代ドイツの古典的劇作家の異邦人像とも比較考定した結果、この通俗劇では、インドであれ中南米であれ南太平洋であれ、非ヨーロッパの人々が、植民地主義の枠組みを前提として捉えられていること、したがって、ヨーロッパ自体を根底から相対視する姿勢は見出しがたいことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This project analyzes how 18th century German popular dramas depict foreigners outside Europe, paying special attention to English dramas and their mutual influences. Compared, also, with foreigners represented by contemporary classical dramatists, it can be concluded that whether they are from India, South America, or the South Seas, non-Europeans are viewed within the framework of colonialism, and thus a relative stance on Europe can hardly be adopted in at least German dramas.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：啓蒙 非ヨーロッパ 通俗劇 植民地主義

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 十八世紀ドイツの通俗劇は、インド人、黒人奴隷、トルコ人ら異邦人のイメージの宝庫である。海外植民地を持たないドイツは、このイメージの基となる多くの情報をイギリスから得たが、逆に、ドイツ劇がイギリス劇に影響を及ぼした影響も少なくない。異邦人像はヨーロッパ内で相互増幅して形成されたのである。だが、従来、このような重層的視点からの研究は、等閑視されてきた。

(2) 異邦人考察には、オリエンタリズム研究が欠かせない。しかし、そこでは、異文化受容を暴力的征服に収斂する図式が潜むばかりか、通俗的文芸も無視されてきた。

本研究は、以上の二点の反省に基づいて始められたものである。

### 2. 研究の目的

(1) 十八世紀ヨーロッパにおける通俗劇が、非ヨーロッパの異邦人像をいかに描いているのか、とくにドイツの通俗劇に焦点を当てて考察する。これを通して、十八世紀ヨーロッパの非ヨーロッパに対する見方のみならず、ヨーロッパの自画像もあぶり出されるはずである。

(2) 十八世紀ドイツは、イギリスやフランスなどと緊密な関係を保ちながら、ヨーロッパの枠組みのなかで「啓蒙の世紀」を担っていた。東西インドや南太平洋等に植民地を所有しなかったドイツは、主としてイギリス経由で非ヨーロッパに関する情報を得た。この点を考えに入れて、イギリスとの文学的相互影響にも考察を加える。

### 3. 研究の方法

(1) 一世を風靡する通俗劇とは、現在の週刊誌やテレビ番組同様、天下の耳目を引く事件を素材にしなが、感傷的言動を駆使し、知的好奇心もほどよく満たし、観客の歓心を買おうとする。後世からみれば、通俗劇には同時代の観客の趣味や嗜好が反映されて、文学的意義は別としても、歴史資料的価値は高い。本研究は、その点に注目し、オーストリア国立図書館において、十八世紀ドイツの通俗劇の調査をする。本研究は、その文献調査を踏まえて、原典の精読による分析が中心となる。

(2) 本研究では、十八世紀ドイツ文学における非ヨーロッパの受容を広く見渡すことが必要である。その点を考えに入れながら、分析対象の通俗劇との比較考定の対抗軸として、レッシングや J.M.R. レンツという古典的劇作家の異邦人像を考察し、ヨーロッパ中心主義に対する姿勢を読み解く。それと同時に、とりわけイギリスの劇との相互影響も視野に入れる。

### 4. 研究成果

オーストリア国立図書館にて十八世紀ドイツ通俗劇の調査をした結果、アウグスト・フォン・コツェブー(1761-1819)が、作品数(約220作)のみならず、娯楽性の点からみても、他の追随を許さず、当代ドイツ随一の人気劇作家であることに得心が行った。本研究の考察の中心に、コツェブーの通俗劇を据えて、十八世紀ドイツの異邦人像の考察をする所以である。

(1) 「東洋人」のインド人、インディオおよび太平洋島民を主題とする通俗劇

ヨーロッパの中のいわば非ヨーロッパ人であるユダヤ人は、当時、「東洋人」とみなされていた。ユダヤ人について画期的描写を施したのが、若きレッシング(1729-81)の喜劇『ユダヤ人』(1749執筆、1754刊行)である。これは、キリスト教的プロイセンに巢食うユダヤ人偏見を暴き、ヨーロッパに対する深い懐疑に貫かれている。

レッシングから高い評価を受けた、J.M.R. レンツ(1751-92)の喜劇『新メノーツァあるいはクンパ国王王子タンディの物語』(1774)は、民衆娯楽劇を装いながら、「地球の片隅」の「インド人」が、啓蒙されたザクセンを標的にして痛烈なヨーロッパ批判を浴びせるものである。

さて、喜劇『イギリスのインド人』(1789初演、1790刊)は、コツェブー第二の人気作品である。当代ヨーロッパの関心を引いたものに、マイソール戦争(第一次1767-69、第二次1780-84) イギリス東インド会社とハイダル・アリー(1722-82)率いるイスラーム藩王国マイソールとの戦争がある。『イギリスのインド人』は当戦争を背景に据え、リンズホーテン『東方案内記』(1596)やベルニエ『ムガル帝国誌』(1670-71)等の旅行記に基づき、異国情緒溢れる作品である。しかも、イギリスの劇作家カンパンド(1732-1811)の時好に投じた感傷的喜劇『西インド人』(1771) 刊行翌年にドイツ語に翻訳 からも影響を受けて、熱帯植民地出身の天真爛漫な自然児、親子再会、結婚と財産のモチーフなどを受け継いでいる。

『イギリスのインド人』の主人公は、マイソール国から追放されたヒンズー教徒である。かれは、「高貴な野蛮人」として、機知に富む台詞を吐きつつ、インドに対するイギリスの暴挙を糾弾し、ヨーロッパ文明に巢食う金銭欲や形式主義を擲諭し、キリスト教も相対視する。しかし、この批判は正面から受け止められず、インドとイギリスの宗教的・政治的・文化的摩擦が描かれることはない。ヨーロッパの抱える根本的問題に対して踏み込まず、無難な大団円を迎える。要するに、レッシングやレンツのように、ヨーロッパの既成社会秩序に根底から疑問を投げかけることはしない。インド文化と接触しながら、ヨーロッパの自己省察への契機は生まれないのである。

コツェブー作『太陽の処女』(1789 初演、1791 刊)は、悲劇『ペルーのスペイン人あるいはロラの死』(1794 初演、1796 刊)とともに、フランス百科全書派のマルモンテル(1723-99)の道徳的感傷的小説『インカ帝国の滅亡』(1777)から、インディオ女性とスペイン人勇士の恋愛物語を素材に借りている。当小説は、イギリスやドイツで評判が高かった。『太陽の処女』は、親子の涙ながらの赦し合い、篤い友情など泣かせどころに事欠かない「お涙頂戴喜劇」である。インディオは、ルソー的自然を体現する「高貴な野蛮人」、あるいは「非理性的野蛮人」として紋切り型で描かれる。すなわち、当代独善的ヨーロッパ文明の枠組みに囚われた観念的異邦人像である。教會的権威が擲擄される一方、国王の権威は善とされ、革命的言動も非とされるのも、当代ドイツの観客の好みを当て込んだものと考えられる。大団円は、フランス革命に対してドイツ領邦国家体制を擁護して終わる。『イギリスのインド人』同様、異国情緒に訴えたり、啓蒙的人間主義的姿勢を示したりするものの、インディオとスペインとの社会的・政治的・文化的葛藤は描かれることはない。それどころか、最後は、インディオ女性とスペイン戦士の結婚で終わる。これは、先住民側みずからが、宗主国に呑み込まれ、ヨーロッパと同一化してゆく過程の開始とみなせよう。インディオ側からみたヨーロッパ批判が表明されるどころか、ヨーロッパ植民地主義の無批判な肯定で終わるのである。

なお、イギリスの風習喜劇の人気作家シェリダン(1751-1816)は、『太陽の処女』の続編の悲劇『ペルーのスペイン人あるいはロラの死』を翻案した。これが『ピザロ』(1799)である。翌年、ドイツに逆輸入されて、人気を博した。

『ラ・ペルーズ』(1796 初演、1798 刊)は、喜劇『奇人兄貴モーリッツ、あるいは植民地パラオ諸島』(1790 初演、1791 刊)の続編的性格も有するが、主題は、世の耳目を驚かせた太平洋探検家ラ・ペルーズの失踪事件(1788 年)である。デフォー(1660-1731)の小説『ロビンソン・クルーソー』(1719)は、ドイツにおいてもカンペ(1746-1818)の『ロビンソン二世』(1779-80)を皮切りに、数多くの変形譚「ロビンソンもの」を産み、一世を風靡したが、『ラ・ペルーズ』もまた、その流れを汲む。つまり、難破した「文明人」が「高貴な野蛮人」の女性に救われて、太平洋の無人島で一人息子を育てる。ところが、搜索隊とともに祖国の妻と息子が登場し、「娘二人に婿一人」という背徳的テーマを妖しく匂わせつつ、お涙頂戴的場面が連ねられてゆく。大団円では、フランス革命後のフランスに帰還せず、キリスト教的市民的美徳を抛り所にして、無人島で「無垢の樂園」の植民地を築く、と主人公が宣言して幕が下りる。いかにも旧秩序を破壊し新道徳を打ち立て

るような派手なポーズをとるものの、実は、観客の性的幻想をくすぐる以上のものではない。大海の孤島にあっても、ヨーロッパの習俗や道徳の価値が批判的に捉え直されるどころか、植民地主義を後押しするのである。

イギリスでは、この翻案、すなわち、フォーセットの『無人島』(1801)が時好に投じた。ただし、主人公がフランス人家族とヨーロッパに帰還する結末に改められている。

(2)「黒人奴隷もの」の通俗劇

レンツによるプラウトゥス(前 254 頃-前 184)の喜劇の翻案劇『友愛はエゴイズムに勝つ、あるいはアルジェの人々』(1775 作、1991 刊)は、北アフリカ人を描写する際、冷徹な目でキリスト教徒の現実を剔抉する一方、北アフリカ人すなわち野蛮、イスラームすなわち邪教という通俗的見方を正す。キリスト教的ヨーロッパこそが、野蛮な暴力の虜として諷刺の矢面に立たせられる。前掲の『新メノーツァ』の場合と同様、啓蒙ヨーロッパの啓蒙という視点がうかがえるのである。

アフラ・ベーン(1640-89)の小説『オルノーコ』(1688)は、「高貴な野蛮人」アフリカの王子が、恋人を奪われ、騙され囚われ、南米植民地へ送られる波瀾万丈の生涯を送る。当小説は、その後の「黒人奴隷もの」の原型となるのである。なお、ベーンの悲劇『アブデラザー、あるいは黒人の復讐』(1676)を基に、エドワード・ヤング(1683-1765)は悲劇『復讐』(1721)を書き、これをドイツではフーバー(1726-60)が悲劇『ツァンガ、あるいは復讐』(1760)として翻案した。

この直後の 1780 年代から約半世紀に亘って、イギリスでは奴隷制度廃止運動が起こり、1807 年に奴隷貿易廃止法が成立し、1838 年には奴隷制全廃に至る。このような時代背景の下で、「黒人奴隷もの」は、ドイツでも一世を風靡する。

さて、ラートレフ(1742-91)作悲劇『ハンプルクの黒人女性』(1775 初演)を以って、ドイツの「黒人奴隷もの」の嚆矢とする。『ハムレット』(1600?)等の台詞が引用されることもあり、当初はイギリス劇の翻訳とみなされもした。奴隷問題に焦点を当て、解放女性黒人奴隷と裕福なドイツ人の悲恋を描く悲劇である。当代ウィーンの黒人アンジェロ・ソリマン(?-1796)は、例外的に宮廷人として出世し家庭も築いたが、没後は剥製にされ博物館の陳列物となる運命であった。黒人は、当時、珍獣以上の存在ではなかった点を考えれば、当悲劇の新しさも分かる。

前掲『オルノーコ』の王子と恋人が、アフリカから送られる先はオランダ植民地南米スリナムである。ヴォルテール(1694-1778)の小説『カンディード』(1759)の台詞「珈琲店で、砂糖を入れたコーヒーを飲み、煙草を吸い、奴隷制度廃止について熱論を交わす啓蒙思想家を擲擄する」を吐く黒人奴隷もまた、スリナムの大農園で働く。

シュタインスベルク(1757-?)作喜劇『黒人奴隷たち』(1779)は、スリナムを舞台にして、白人娘の親友の黒人女性解放奴隷が活躍する「お涙頂戴喜劇」である。慈愛深い農場主が人間的な農場経営を宣言して、大団円を迎えるが、奴隷制自体に疑問が呈されることはない。

1791年のサン・ドマングの奴隷反乱直後に書かれた革命劇が、デーナー作悲劇『反乱の凄惨なる結末、あるいは黒人』(1792)である。この悲劇は、イギリス領西インド諸島を舞台に、農場主と奴隷反乱軍の間で翻弄される英雄的黒人奴隷「黒いアレクサンダー大王」を主人公に据える。かれは、イギリスの漸次的な奴隷制廃止の動きに希望を託す一方、他の黒人たちは、「高貴な野蛮人」の末裔どころか、残忍なヨーロッパ人と何ひとつ変わらない。主人公は「太陽の息子」と呼ばれ、無慈悲な農場主の娘「太陽の娘」の恋人がいるが、前掲コッツェブーの『太陽の処女』をなぞりながら、「インクルとヤリコ物語」(1711)以来の「先住民女性/白人男性」の組合せが、「先住民男性/白人女性」に逆転している点は興味深い。

なお、イギリスのピカースタフ(1733-1808)作喜歌劇『南京錠』(1768初演)は、西インド諸島出身の滑稽な黒人奴隷を活躍させて、人気を博した。これは当代ロンドン社会の底辺に生きる黒人をリアルに描く。④以上の諸々の「黒人奴隷もの」を踏まえながら誕生したのが、コッツェブーの野心作『黒人奴隷』(1794初演、1796刊)である。副題として、「歴史的・劇的絵画」と銘打つ。コッツェブー曰く、奴隷制批判者シュプレングエル(1746-1803)の『黒人奴隷貿易起源』(1779)、あるいは峻烈な植民地主義批判を繰り広げるレーナル(1713-96)の『両インド史』(1770)等に基づいて、「作り物ではない」と。だが、直接的な典拠は、西インド諸島の黒人奴隷の状況を描くコルプ編『黒人奴隷の風俗と運命の物語』(1789)である。

『黒人奴隷』は、黒人奴隷の状況を具体的な数値を挙げて描き、その心理にもよく踏み込み、軽妙な筆遣いで具体的日常を浮き彫りにしてみせる。上記の「黒人奴隷もの」とは、その点で一線を画す。イギリス植民地ジャマイカを舞台にして、極悪非道な農場主とその慈悲深い 奴隷解放論者ウィルバーフォース(1759-1833)を信奉する 弟、黒人女性奴隷、その夫と舅の絡む、波瀾に富む筋が展開される。そして、大団円を迎えれば、農場主の博愛的な弟と忠実な黒人奴隷とが親密な人間的関係を結ぶに至る。だが、家父長的農園を牧歌的に謳い上げるとき、その背後には、「善良なヨーロッパ」と「忠実な植民地」の関係が二重写しにみえる。この結末は、植民地支配の批判を意味するどころか、逆に、植民地の孕む政治的問題点を巧みに隠蔽するものともみなせよう。いかに黒人奴隷の悲惨な暮らしが鋭利に描かれるにせ

よ、現代からみれば、ヨーロッパの自己批判的精神が不徹底であるといわざるをえない。なお、イギリスでは、即座に翻訳され、評判を巻き起こした。

コッツェブーは、観客動員をあてこむ異国趣味満載の劇世界を描く。しかも、「お涙頂戴喜劇」の伝統を利用して、分かりやすく、「人間性」あふれる「啓蒙」の看板を、性的くすぐりもちりばめながら、掲げる。十八世紀後半は、近世から近代への転形期を迎えて、カントの批判哲学が登場し、レッシングやJ.M.R.レンツらが自己批評的な「啓蒙の啓蒙」の局面を文学的に表現した。だがその一方、コッツェブーには、異邦人に対する真に開かれた感性も思考も、ひいては、ヨーロッパを自己相対視する批判的姿勢も見出すことはできない。ひっきょう、植民地主義を肯定して、ヨーロッパの現状追認に徹するのである。逆に言えば、かように「大衆迎合的」であればこそ、ドイツ国境を越えて、汎欧米的人気を誇ったのであろう。当代ドイツ観客の非ヨーロッパやヨーロッパに対する見方も推し量ることができる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

藤田緑、アビシニア狂詩曲 皇太子アラマコ  
の教奇なる短い生涯、国際文科研究科論集、  
査読有、第20巻、2012、pp.1-15.

〔学会発表〕(計6件)

藤田緑、ングギ・ワ・ジオンゴの世界  
抵抗・言語・伝統、第50回「中東」表  
象研究会、2014年12月25日、仙台

佐藤研一、若きレッシング作喜劇『ユダ  
ヤ人』の新しさ、第83回十八世紀ドイツ  
文学研究会、2014年12月21日、東京

佐藤研一、レッシングの喜劇『ユダヤ人』  
キリスト教ヨーロッパからみた「異  
邦人」描写、第48回「中東」表象研究会、  
2014年4月30日、仙台

藤田緑、ポーア人の描くポーア戦争(1)  
ハーマン・チャールズ・ボスマンを  
中心に、第46回「中東」表象研究会、2013  
年10月23日、仙台

佐藤研一、J.M.R.レンツの翻訳における  
問題点 喜劇『軍人たち』を中心に、  
第78回十八世紀ドイツ文学研究会、2013  
年5月16日、東京

佐藤研一、コッツェブーの描くインド人  
喜劇『英国のインド人』をめぐる、  
第75回十八世紀ドイツ文学研究会、2012  
年5月19日、東京

〔図書〕(計1件)

佐藤研一訳 J.M.R. レンツ作喜劇『家庭教師』  
『軍人たち』鳥影社、2013年

6 . 研究組織

(1)研究代表者

佐藤研一 ( SATO KENICHI )  
東北大学・大学院国際文化研究科・教授  
研究者番号 : 80170744

(2)研究分担者

藤田緑 ( FUJITA MIDORI )  
東北大学・大学院国際文化研究科・教授  
研究者番号 : 10219024